

地球家族が奏でる幸せのメッセージ

自己紹介



この半世紀に見る創価学会とSGI



大誓堂での勤行会の点描から

横田基地のアメリカ人メンバー



特派員として10年間駐在したパナマ

なぜ外国人が仏教を求めるのか



世界で語られている日本人のジョーク



私自身の入会動機と信仰体験

「はげあたま」をモットーに



プロフィール 清水 武 (しみず たけし)

1941年生まれ 早稲田大学卒 NHK学園高校教諭 聖教新聞パナマ特派員 定年後スペインのマラガ大学留学 これまでの訪問43カ国 現在、英語・スペイン語講師、海外留学アドバイザー シニア大衆登録講師 日本ペンクラブ会員 東京都観光ボランティア ホームページ <http://donky.la.cocan.jp>

——地球家族が奏でる幸せのメッセージ——

はじめに

ご紹介いただきました清水武でございます。日蓮大聖人のゆかりの地、また国内・海外からも憧れの地となっている鎌倉を訪れることができ、とても嬉しく思っております。

今日は広宣流布の大事な柱である太陽会の皆さまに、私の50年余りの信仰体験や、世界40カ国余りを訪問してきた見聞をご報告し、今後の生き方のご参考にしていただけたらと思っております。40分の時間をいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

自己紹介

最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。住いは青梅線の昭島市。20歳で創価学会に入会して56年。この3月には喜寿、77歳になりました。

現役時代には大学（早稲田）を卒業すると、国立市にあるNHK学園高校の教諭を務め、その後、聖教新聞社に入り、中南米特派員としてパナマに派遣されました。特派員だった10年間には、北南米大陸とヨーロッパの国々を訪れておりました。

そんな現役時代のつながりから、60歳の定年1年目には横田基地の中にある「セントラルテ キサスカレッジ」で英語を、2年目には南スペインのマラガ大学でスペイン語を学び直しレベルアップに努めました。＜レジユメ写真＞せっかく身に着けた外国語を広布のために生かしたい、また定年後まだ20年から30年はあるであろう人生への再投資のつもりでしたが、おかげさまで現在は英語やスペイン語の講師をしたり、SGIで大誓堂の勤行会に来日した海外メンバーのアテンドと、海外に出て行く日本人メンバーへの激励やアドバイスなどをさせていただいております。

一方で、定年後のライフワークと定めた文学紀行で世界の名作の舞台を訪ねてきました。この10年あまりでシェイクスピアの「ハムレット」、ユゴーの「レ・ミゼラブル」、セルバンテスの「ドン・キホーテ」、トルストイの「戦争と平和」、ミッチェルの「風と共に去りぬ」、モンゴメリーの「赤毛のアン」など計15作品の舞台を訪ね原稿を書いてきました。＜レジユメ写真＞

また、昨年からは東京都観光ボランティアとして新宿駅周辺で来日した外国人のお世話を、今年からは都庁の展望室で東京の街の案内をしています。2年後のオリンピックには通訳ボランティアとして貢献できればなんて夢を描いているところです。

はげあたま

さて、こちらにお邪魔して、会場に私と同じような仲間がいることを拝見して親しみを感じています。この頭です。先日、こんなことがありました。

私は年金生活に入ってからできるだけ節約生活を心がけるようにしています。散髪代もその一つ。床屋さんに行くのをやめ、けっこう手先の器用な家内がハサミを操り、私の頭を刈っています。

とはいっても、大事な行事に参加するときや、大切な人と会わなければならないようなときには、やっぱり床屋さんに行くんですね。

でも、この頭です。＜頭を下げて指でさす＞ 他のお客さんよりも髪の毛のある部分がぐっと少ない。そこで散髪が終わり料金を払う段になって、店主に言ってみたんですね。

＜落語の話し方で＞

「マスター、ほらご覧のように、私の頭はほかの人の髪量の半分以下ですよ。禿げている部分はまったく手をかけなくてもよいし……。だから料金も少しは割り引いてくれませんかねえ」。と、その主人、なんて言ったと思いますか？

「旦那さん、そんな無理をおっしゃらないでくださいよ。確かに旦那さんの髪の毛は少ない。ですから、私としては一本たりとも抜いたり傷めたりしてはいけないと思って、大変な気を遣ってハサミを動かしているわけですよ。逆にこちらが割増料金をいただきたいくらいですよ」

敵もさるもの、上手をいくもんですねえ。あの中老年のアイドル、綾小路きみまろさんだったらこう言うでしょう。「中学時代はイガクリ頭。高校時代は髪もふさふさの美少年でした。あれから 60 年——。昔は目の前が明るかった。今、明るいのはこの頭だけ……」ともあれ、頭が輝いていること即、人生が輝いていることには通じませんが、でも頭の輝きのように第二の人生も輝かせていきたい、というのが今日の私の話しのテーマであります。

大誓堂での勤行会の点描から

さて、SGIメンバーの状況が集約された場面の一つが大誓堂での勤行会です。本年 11 月に完成 5 周年を迎える大誓堂の勤行会には毎日、約 1000 人あまりの日本の学会員と共に 20 人から 100 人の海外メンバーも参加しています。国の数で言うと少ない日でも 5・6 カ国、多い日は十数カ国からやってきています。

英語を初めスペイン語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語、タイ語、インドネシア語、韓国語、中国語（北京語と広東語と 2 種類ある）と言葉も文化も違います。でもみんな、日本の学会員とまったく同じように「ニジセソソ……」と経文を読み題目〈南無妙法蓮華経〉を唱えています。そんな姿を見ると、まさに平和を願い行動する地球家族の連帯が感じられて深い感銘を覚えてきます。

遠くは日本の反対側ブラジルから 20 数時間と 10 数万から数十万円の旅費をかけて来日するメンバーの熱い求道心にいつも感動しているところです。

横田基地のアメリカ人メンバー

ここで、世界が宗教をどう位置づけているか、身近な一例として私が担当している国内の外国人メンバーの状況をお話してみたいと思います。

横田基地に入ったことがある方はいらっしゃいますか？

敷地の大部分は福生市に属していますが、私の住む昭島市もその一部が入っています。

ごく最近では、トランプ大統領が成田でも羽田でもなく、米軍の横田基地に降りたことでテレビにも映りましたよね。またつい先日は北朝鮮から解放されたアメリカ人 3 人も横田基地を経由してアメリカに戻っています。

この横田基地にSGIの組織として「サンタメリカ」と呼ばれるグループがあります。「サンタメリカ」という名前は、“三多摩のアメリカ”という意味で、メンバーは基地で働くアメリカ人とその家族が中心です。

今から 20 数年前、私は特派員から帰国してまもなくその組織の支部長に任命されました。それから 1 年後、サンタメリカは仏教団体・創価学会の支部の一つとして、横田基地の宗教局に正式に登録されました。この登録によって、私たちはキリスト教やユダヤ教とまったく同等に扱われることになり、次のような特典が与えられたのです。

- チャペル(教会)の施設を、いつでも会合などに使用できること。
- 病院や図書館など公共の施設に、仏教またSGIの書物やパンフレットを置くことができること。
- 基地で発行している新聞や基地内の放送に必要なお知らせを載せられること。
- 遠くでの行事に空軍のバスが無料で提供されること。などです。

まずは教会、チャペルです。基地のゲートを入れてすぐのところに、広い駐車場を持った明るい感じの教会があります。100人ほどを収容できる本堂のほか、10人から50人を収容可能な大小五つほどの部屋があり、どんなイベントに使ってもよいといえます。

本堂には、キリストの像も十字架もありません。40年ほど前から、特定の宗教の本尊を置くのは禁止されることになった。「ユダヤ教でもイスラム教でも仏教でも、必要であればその行事のときに本尊を安置して結構です」とのこと。つまり、すべての宗教に公平、中立なのです。

私たちは、チャペルの部屋を使って会合をもっています。ご本尊を置いて勤行もします。館内は冷暖房が良く効いており、椅子やテーブルもそろっていてとても使いやすいですね。

基地内での新聞や放送といえば、ある日、私が車で昭島市内を走っていたとき英語のラジオ番組のなかで、サンタメリカのセミナーの行事が放送されているのを実際に耳にしました。「〇月〇日の午後1時から、〇〇センターで仏教のセミナーがあります。どうぞ自由にどなたでもご参加ください。歓迎します」といった英語放送です。

現在は基地の縮小とともにメンバー数も減ってきてグループとなり、私はアドバイザーの立場ですが、支部長だった当時、この軍のバス提供による本部見学会を開催しました。

小児科医で空軍の少佐でもあった地区部長が、車両部隊に行事計画とバス依頼申請書を提出すると、20人乗りのバス3台がOKとなりました。運転はさすが軍なので資格を持ったメンバーが何人もいます。

中央道から首都高速へ。途中の料金所の通過が自分にとってはまた驚きでした。車はどれも左ハンドル。私は先頭車の右側の助手席に座りました。料金所で車両部隊から受け取った10センチ四方ほどの米軍専用のチケットを渡すと、料金所の係りの人はごく当然のように「どうぞ」と。こうして3台、往復計4つの料金所ともパスしたのです。基地が認めた公式活動。しかもガソリン代、高速道路料金も含めて費用はいわば「横田基地もち」とも言えます。

この本部見学の際、仏教関係の書籍を多数いただき基地の図書館に贈呈。図書館には、今も日蓮大聖人の仏法またSGIを紹介した本が並んでいます。

これらは宗教そのものを大切にす民主的なアメリカの風土、機構からくるものです。ともすると宗教をうさん臭いものと見る人の多い日本とはずいぶんの違いですね。

しかも今、アメリカ国防総省の本庁舎ペンタゴン（英語で「五角形」の意味）には、各宗教が自由に行事を持てる期間があり、2年前からアメリカSGIではそのペンタゴンの建物の中で仏教セミナーを開催しています。会場には前線の将校なども出席しSGIへの理解を深めているようです。<レジュメ World Tribune の紙面>

今、私は海外留学アドバイザーとしてSGIで日本から海外に留学する学生への指導もしています。

「ホームステイ先ではそのホスト（家主）に言っていきなさい。「I am a Buddhist」（私は仏教徒です）」と。「SGIメンバーといってもわからないからね。そして『仏教徒は朝晩お祈りをします』」と。つまり朝晩の勤行・唱題のことを言っているわけです。

実際に、その方が「信じている宗教はありません」などという留学生よりはるかに信頼が深くなる。「ウチにはしっかりとした考えを持ったいい子が来た」とホストも喜んでくれます。宗教のない人というのは逆に信用できない。宗教を大切にする欧米ではそんな傾向もあるからです。これが欧米の宗教に対する考え方と実態なのです。

特派員として10年間駐在したパナマ

さて、話しは少し過去に飛びます。私は1970年代後半から80年代にかけて10年間、聖教新聞のラテン・アメリカ特派員としてパナマに駐在しました。あのパナマ運河のある国ですね。

パナマに行った、または船でパナマ運河を通過したという方はいらっしゃいますか？北南米大陸の地峡で一番狭くなる場所から、太平洋と大西洋を結ぶ運河ができた。南北アメリカの二つの大陸と世界の二大洋を運河で結ぶことから「世界の十字路」と呼ばれ、パナマSGIの機関誌も「プエンテ・デ・パス」（スペイン語で「平和の架け橋」という意味です）とのタイトルとなっています。英語で「Bridge of Peace」ですね。

私が赴任した当時、パナマの組織はまだ草創期にありました。でも五つあった支部の支部長は、それぞれパナマ大学教授、弁護士、テレビ記者、パナマ運河に勤務する公務員、それに原住民族だったクナ族の壮年と多彩でした。国民の9割がカトリック教徒の中でスペイン語が母国語の彼らが仏教徒として頑張っているのは感動的でした。

池田先生はパナマを3回訪れメンバーの激励のほか、大統領との会見やパナマ大学訪問など文化教育交流も進めてきています。

20世紀の終わりには、パナマ運河とその両側の土地がアメリカからパナマの国に返還されました。そこに国立パナマ大学の新キャンパスができた。そしてキャンパス入り口にある大きな公園が「池田大作公園」と命名されたのです。パナマに限らず、アメリカやブラジルなど池田先生やSGIを顕彰してその名前を冠した道路や公園は今や世界の各地に数多くありますね。

私はすでに日本に帰国し定年になっていたのですが、嬉しいニュースにボランティアとしてその開園式の取材とメンバーの激励に行ったのです。2007年、ちょうど10年前のことでした。<レジュメ写真：私の撮った写真です。聖教の1面に大きく掲載されました>

そして昨年には、そのキャンパス内に、池田先生作詞の「母」の歌詞が台座の名盤に刻まれた「母子の像」が設置されました。{♪母よ、あなたは～}との出だしの「母」の歌は、日本の婦人部員の皆さんのすべて、また壮年、青年部員の大部分の方も知っている、命をめぐむ母の尊さを称えた感動的な歌詞でありメロディーですよ。

「母の安らぎがあつて平和はある」といった万国共通の理念に大学の関係者が共鳴して建てられた経過があるとのこと。歌詞が刻まれた碑があるというのは、パナマが初めてではないかと思えます。

私事で恐縮ですが、パナマ日本人学校の校歌の作詞は私です。開校まもなくで校歌がまだなかった学校が、商社やメーカーなどパナマに駐在する日本人に呼びかけ、40作品余りの応募があったなかで最終的に私の作品が選ばれた次第です。今

も体育館の壁にその校歌が掲げられています。

ここで少し話がそれますが、実は私がパナマに赴任したのはこちらで副総合長をしている薬袋さんがアフリカ・ガーナに赴任した翌年のことでした。薬袋さんが赴任となるその前年、本社編集局の同じ部に所属していた薬袋さんと私は、創価大学開学の年の新年号の2ページにわたる特集記事の担当になりました。

当時あった建物といえば、現在の事務棟ともう一つの棟、松風センターと体育館くらいだけでした。学生が入学してきたらこんな風になるだろう、想像を膨らませ予測記事をまとめたのです。

当時はバスの便もほとんどなく、帰りは北側の滝山街道まで歩いて行かなければならなかった。そこで少しでも近道をと、現在の中央教育棟の裏にあたる小山の木々や藪をかき分けかき分けながら二人で降りた次第です。

そんな開学時からは想像もつかない大学の発展ぶりですが、今年11日と12日の聖教新聞の紙面を見て、池田先生の構想のすごさに今更ながら感嘆する次第です。

それは11日付の紙面には、中国の李克強首相を歓迎する原田会長の隣に程永華駐日中国大使が写っており、翌12日の紙面には本年3月ロシアから赴任したガルージン駐日大使と原田会長が会見する写真が大きく載っていたことです。

知っている方も多いと思うのですがお二人とも創価大学の留学生でした。大国・中国とロシアとの外交は日本にとって極めて重要であり難しい面もあります。奇しくもそんな重要な立場に創価大学で学んだ二人が就いていることに、深い感銘を抱いた次第です。

なぜ外国人が仏教を求めるのか

話は戻ります。では、アメリカやパナマのように、本来がキリスト教の国、また歴史や文化・社会体制の違う国々の人がなぜ仏教をたもつにいたったのでしょうか？

いろいろな要因がありますが、一つは「三証」から見るができると思います。文証、理証、現証、という三つの証拠。つまり教えを書かれたものがあるか（文証）、教義が道理に合い矛盾していないか（理証）、そしてその宗教を実践して現実に生活が変わっていくか（現証）、といったものです。

文証で言えば、私どもには御書があります。欧米ではバイブル（聖書）が該当しますね。

理証について言えば、仏法は、因果の法則、生命の永遠、を根本に説かれており、矛盾はありません。

そして現証とは、宗教を実践した結果の証拠です。つまり信仰体験。これは、ここにいらっしゃる学会員のお一人お一人がつかんでいるものです。

次にロシアのように、なぜかつて社会主義だった国、つまり「物を中心に考え平等に重きを置く、そして宗教を否定していた」国の人々が仏教を信ずるようになったのでしょうか。

それは 仮にモノの面で平等になったとしても（現実にはなかなかそうならない）、人間本来の悩み、家庭不和、病気との闘いなど、仏教が説く「生老病死」という人間の根本的な悩みは、どんな社会体制に住む人間でも避けることはできないからです。

私たちの唱えている南無妙法蓮華経は、宇宙のリズム・法則であり、私たちの生命のリズム、法則です。わかりやすく言えば、ニュートンが発見した万有引力の法則と同じように、この生命の法則は宇宙に厳然とある法なのです。

約2500年前、インド（現在のネパール）に生まれた釈尊は、その生涯に膨大な量の教え

と経典を残されました。その中で、最後の8年に説かれた法華経が最高の教えといわれていますが、実はその法華経の教えの究極が南無妙法蓮華経なんです。

他にも信心した友人の変わっていく姿に引かれて、とか入会の動機にはいろんな要素がありますが、海外の人の良いところは、見栄とか体裁、外聞を気にせず、よいものはよいと素直に認め実践することなんです。日本人の場合だと、よいと分かっても、自分の意志よりも、周囲の目を気にしてなかなか踏み切れない、といった面が往々にしてあるのを私は感じています。

世界で語られている日本人のジョーク

ここで、世界で語られている日本人についてのジョークをご紹介します。海に囲まれた島国・ニッポン。世界の中でも特異な存在である日本と日本人についてこんな小咄が流布しています。

よく知られたタイタニックのジョークです。たぶん、この会場にも知っていらっしゃる方もいるかもしれませんが・・・。

「ゴ——」。 <ジェスチャー大きく>

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦女子を優先させようとして船長が説得を試みます」

まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」(解説)

イギリス人男性に：「あなたは模範的なジェントルマンだ！」(〃)

ドイツ人男性には：「君の国の法律ではそうなっているよ」(〃)

そして日本人男性には：「皆がそうするからあなたもそうした方がいいと思いますよ」

このように、日本人は、まず周りに合わせようとするんですね。周囲の目を気にし、突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするように自分もする、という傾向を持っている。日本人は、他人の目を気にしすぎるように思います。それが、いざ何か新しいことを始めよう、また正しいと思われる宗教をやってみよう、という心の足かせになっているような気がします。

私自身の入会と信仰体験

この会場には初めて創価学会の会合に参加された方もいらっしゃるかと思います。そこで、最後に、私がなぜ入信したか、またその後どんな人生を歩んできたかについて少しお話してみたいと思います。

長野県の進学高校を卒業した私は大学受験に失敗。その直後に母が脳溢血で倒れ長期入院し家の経済事情から進学を断念せざるを得ず、上京し都内の小さな自動車部品販売会社で働いていました。そんなある日、会社の女子社員に創価学会の座談会に誘われたのです。出席してみると仏教哲学の一部が語られていました。話はやがて私を中心に展開していきました。私は率直に抱えている悩みや大学進学の夢を話しました。

当時、私は「赤旗」を購読するなどそれなりに社会について考えていました。周囲の言うことをすべては納得できなかったのですが、「饅頭がうまいかまずいかは食べてみなければわからない。宗教もまずやってみて自分で体験をつかんでみてはどうか」との勧めで、ともかくも“試してみる”ことにしたのです。

そのころの私は住み込みで会社のビルの4畳半程の部屋に同僚と2人で寝ていました。時代は東京オリンピック（1964年）を前に、日本の経済は右肩上がり。東京へは地方から大勢の高卒の若者が働きに出てきて、会社の仲間たちもみんな地方からでした。

月給は1万円そこそこ。仏壇を買えるようなゆとりはありません。先輩のアドバイスで枕もとの壁にワイシャツの箱を画鋏で貼り付け、その中に御本尊を安置しました。勤行を始めると、会社の仲間が冷やかしかし半分に覗き見にやってきました。

しかも、当時のマスコミは学会の悪口をさかんに書いていました。「創価学会は貧乏人と病人の集まりだ!」。確かにそうした一面はあったと思います。でも、その批判に対して先輩の次の言葉は私にも強い確信を与えてくれました。

「偉そうなことを言っているけど、じゃあ、そう言う本人は、貧しい人や病気で苦しんでいる人にどんな救いの手を差しのべてきたんだい!？」本当にその通りだと思います。一番、苦しんでいる庶民に手を差しのべてきたのが創価学会だったのです。

入信した私は慣れない勤行と唱題を始めました。その一方で、仕事をしながら必死の受験勉強もしました。そして半年後には幸いにも早稲田大学商学部合格することができました。

でも仕事が経理関係で大事な立場にあったため、すぐに会社を辞めるわけにはいかなかった。幸いに当時の学部は昼夜開講制だったので、仲間より早い時間に退社して大学へ。授業から帰ると再び会社で残った仕事を夜11時、ときには深夜まで取り組みました。

そんななか、思いもかけなかった嬉しいことが起こったのです。簿記も会計科目もある大学の授業が現場の業務にも通じているということで、なんと4年間の授業料を会社が負担してくれたのです。まさに信心の功德と言えそうです。

やがて経理関係の後継者ができて社長も快く退社を了解してくれたので、私は大学を卒業するとNHK学園高校の教諭の職に就きました。

その後、聖教新聞の特派員として主に中南米の国々を回っていましたが、大変だったときはいつも題目が困難を乗り越え、道を切り開く力になってきました。

うつになり人生のどん底へ

60歳で定年後は最初に述べましたように、南スペインのマラガ大学に1年間、留学しました。ところが帰国の半年後、私はうつになり、いつ死んでもおかしくないほどの人生最悪のどん底に陥ったのです。

この歳で、まさか自分がうつになるなんて信じられなかった。妻も「そんなことは絶対にない」と信じようとしませんでした。でも病状はまさにうつ症状そのものでした。

何に対しても自信がなく、決断力に欠け、夜もよく眠れなくなった。すべてが灰色に映り、生きていること自体がなくなり、時に自殺の考えさえ浮かぶようなこともありました。

原因はわかりませんでした。自由でのびのびとしていたスペインから忙しい日本に戻った環境の変化からか、子供の結婚問題等いろんな心労が重なった故からか、あるいは自分が人一倍まじめで心配性である性格からきたものなのか……。

そして、なんとというめぐり合わせなのでしょうか!

その体調が最悪だった翌年の初め、前年の秋に頼んでおいた仕事のオファーが重なるように続いたのです。一つは、大学の通信教育部の英語講師。一つはNHK学園高校の添削講師。一つは昭島市内のカルチャーセンターのスペイン語講師。さらに、大学時代の友人が社

長の会社から「社長室参与で」との話も受けました。しかしながら、これらの仕事のオファーも、体調の悪さを理由にすべて断わらざるを得なかったのです。

昭島市内の神経科病院に通い、何回かは都内の高名な専門医も訪ねました。また精神科のドクター部員のところも訪れました。

睡眠薬を処方され、強すぎたのか寝ていると身体が硬直したようになってしまうこともありました。病院に行く途中で、前から来る自動車が自分をひいてくれないかなあ（自殺すると保険が出なくて残された家族が困る、なんて妙なところだけ意識が残っていて）、とか、妻にも心配をかけ続けた辛い日々が続きました。

どの仕事も断ってしまった後は、未来に絶望的な思いを抱いていました。朝起きると、何をすることもない長い1日が始まる。夜になるとまた暗く長〜い闇が始まる、と悶々とした日々でした。一時は仕事さえあれば、駅のトイレ掃除でも、とまで思うこともありました。

そんなある日、お天気キャスター倉嶋厚さんが自らのうつ体験を綴ったエッセイを読む機会がありました。

「やまない雨はない、妻の死、うつ病、それから・・・」。倉嶋さんはそこで「うつ回復の大事なポイントは100%完璧を求めないこと。8割を目指すくらいでいい。極端な例、人生8勝7敗でも勝ち越しなんだから」と強調していました。それを自分にも言い聞かせていったところ、少しずつ心も落ち着いていったのです。

シルバー人材センターの仕事から立ち上がる

こうしたなか、やる気さえあれば誰でも受け入れてくれるシルバー人材センターの存在を知り会員として登録、まず、自転車整理の仕事から始めたのです。<レジュメの写真>

JR青梅線 昭島駅南口の駐輪場。朝6時、たばこの吸い殻の落ちている駐輪場の掃除から始まりました。「おはようございます」「いってらっしゃい」と利用者への声かけや、身体を動かしていることが治りかけた病状から完全回復への大きな力になっていたと思います。

ちょうど5年間、自転車整理を続けましたが、仕事は単純で、週3日か4日、1日4〜5時間だったので、もう少し何かしなくては、と立川のハローワークに行ったところ、偶然にも人材派遣会社が募集する都立高校のティーチング・アシスタント（先生の助手ですね）との仕事を紹介されたのです。続いて、英検受験者の指導、ということで都立日野高校と砂川高校へ。ここから現在に続く仕事が開けていったのです。

しかもそれ以来、以前にも増して元気になり意欲的になった。文学紀行を始め、新聞・雑誌に寄稿し、英語やスペイン語の講師もできるようになった。いわゆる「変毒為薬」できたのです。

私の場合、幸いなことに病院での的確な療法と薬、妻の支えと祈り、関係者の励ましで1年弱でその苦境を乗り越えることができました。病気の間も勤行の大切なことは意識して取り組んだのですが、集中できず、時にはリン棒で自分の頭を血がにじんできるとほど激しくたたき、といったこともありました。

今思うに、うつを克服できた最大の力は、それまでの題目の蓄積があったからと、確信しています。人生極限の土壇場で蓄えてきた題目が自分を救ってくれた、との実感なのです。

一般に完治がなかなか難しいという病気です。私の場合、短期間でそれを乗り越えることができたのも、根底に信仰という強い軸があったからこそ、と思っています。

題目から挑戦の勇気が湧く

50 年余りの信仰の中では大変なときもありました。仏法は魔法ではありません。創価学会の信心をしてもすぐに願いが叶い、すべてが順調になるとは限りません。自身の過去からの宿業という問題もあります。でも、何があっても題目でその悩みや問題を乗り越えようとする勇気が出てきます。「ようし」と挑戦の心が生まれてきます。生命力が出てきます。それがスゴイのです。

私も入会当時は会社の寮での勤行が恥ずかしかった。でも朝、題目を唱えていると命が躍動してくるようでした。いやな仕事でも前向きに取り組めた。その連続が現在の人生につながってきたと感じているところです。

創価学会の「創価」とは価値の創造を意味しています。信心とは無限の向上。どれだけ自分を高め、能力を発揮し人生を充実させていくか、社会に貢献していくか——池田先生はこれを「人間革命」との言葉を使い表現されています。

一方、世界平和に貢献も創価学会の活動の大きな柱です。昨年末のノーベル平和賞に I C A N (International Campaign to Abolish Nuclear Weapons) が選ばれ、その支援団体として授賞式に S G I の代表も招待されました。またローマのパチカンではフランシスコ法王も S G I 代表団との懇談で、S G I の活動を高く評価していました。

このように創価学会員の生き方は、個人としても団体の一員としても、人間として最も理想的で崇高な生き方だと私は思っています。

「はげあたま」をモットーに

先日、大手飲料メーカー・サントリーの新聞(日経) 広告が目にとまりました。ページいっぱい大きな文字で「60 代の若者たちへ」のタイトルに続き「この先をどう生きるか。しまっておいた夢を取り出してみないか」と脚本家の倉本聰氏が呼びかけていました。とても刺激的なタイトルですね。

人生 100 年時代においては 60 歳も若者なのです。何かを始めるのに遅いということはない。この長寿化時代に老後をどう生きていくかが問われています。信仰している私たちには「広宣流布」という壮大なロマンと夢があります。私自身は、創価学会創立 100 周年の 2030 年をその最終目標として目指しているところです。

最後に私のモットー「ハゲアタマ」をご披露しておきたいと思います。髪の毛が少なくても残念ながら散髪料金は安くならない。そこで私は「定年後を輝いて生きる」ために、率先してこの「はげあたま」的生き方を心がけています。「はつらつ」と「げんきに」「あかるく」「たのしく」そして「まあるく」です。＜板書＞特にこの最後の「まあるく」が大事ですね。人生、すでに甘いも辛いも経験し、角が取れて「まあるく」なっているはずですから、今さら人間関係でギスギスしてもしょうがない。穏やかに「まあるく」いくことです。題目を唱えていれば「十界」の生命論から高い境涯になっているはず。つまらない顔をしていると、つまらない人生になってしまいます。

題目を唱え、生命に弾むような勢いがあれば、必ず人生も躍動してきます。私はこれからもこの「ハゲアタマ」をモットーに生きていきたいと思っています。今、髪の毛のふさふさの方も、どうぞこのモットーの実践だけはお勧めです。人生が明るく楽しくなってきます。

世界への仏法の広がり、文化比較から禿げ頭論へ、話しはあちこちに飛んでしまいました。皆さまのご参考となればこんな嬉しいことはございません。

以上で私の話を終わらせていただきます。長時間のご清聴ありがとうございました。